

## 【研究ノート】

## 精霊にみる民族表象

南山大学人類学研究所 非常勤研究員

須田 征志

## はじめに

本稿は、呪物に彫刻されている近隣民族に焦点を当て、精霊と他者表象を考察することを目的とする。精霊には、しばしば異民族や異国人などの他者が表象されることがある。ストーラー (Stoller, P.) は、ニジェールのソングアイ社会でみられる憑依の事例から、他者表象を「模倣」としてとらえ、他者の能力や権力などの「力」を自分たちに取り込むためにおこなわれると述べている。すなわち、人々は他者を「模倣」することによって、その他者がもつ「力」を自分たちものにし、それを使いこなせるようになると考えているのである。それ故に樹物は強力な他者を表象するということである (Stoller, 1995)。

このような異民族や異国人などの外部性を模倣的に取り込む状況は、東アフリカ海岸地域における精霊憑依の特徴の1つとして取り上げられてきた (Giles, 1987; Lambek, 1988; 慶田, 2003; 花淵, 2005)。インド洋交易の中継地であった東アフリカ海岸地域に登場する精霊の多くは、その社会が歴史的に接触を持ったことのある外部の異民族や物事を模倣した特徴を備えているとされる。この特徴は、本稿で対象とするサンバア (Msambaa) の人びとの居住地域であるルシヨトにおいても同様である。

ルシヨトが位置する西部ウサンバラ山地一帯は、19世紀初頭にかけて拡大した象牙や奴隷などを海岸部に運ぶ長距離交易ルートの1つであるパンガニルートの中継地点として繁栄した歴史をもつ地域である。また、イギリスによる植民地化以後、タンガ州の内陸部には広大なサイザル麻のプランテーションが建設され、タンザニア全土から多様な民族を移動労働者として呼び寄せた歴史をもつ。この様な状況のもと、歴史的にサンバアと他民族との間では活発な交流がおこなわれてきた。

この様に、精霊と近隣民族との関係を考えると、精霊は近隣民族や異国人などの外部性を模倣し、それら外部性の「力」を伝統医療従事者の「力」として取り込む機能として捉えることが可能である。また、このような外部性の模倣は、伝統医療従事者が所持する「呪物」にも現れる。呪物は、近隣集団や異国人などの外部性を取り込んだ精霊の「力」を具現化したものである。ルシヨト地域における呪物の特徴は、関係する精霊の名前が付けられ、主にヒョウタンが容器として用いられており、中には複数の植物などを乾燥させた粉末状の「薬」が入れられ、その表面には精霊が好む色のビーズや動物の毛皮など多様な素材の装飾がなされている。そして、それらの呪物には近隣集団や異国人の特徴を表象する名前が付けられる。

以上のことを踏まえながら、精霊と近隣民族との関係を考察するにあたり、先ず、調査地であるタンザニア・ルシヨト地域の歴史を 18 世紀半ばに成立したサンバア王国中心に述べる。そして、サンバア王国が統治していたパンガニルートの歴史を取り上げ、周辺民族とサンバアとの関わりを提示する。次にルシヨト地域で活動している伝統医療従事者が所持している呪物、特に蓋に近隣民族の顔が彫刻されている呪物を取り上げ、呪物の用途と近隣民族の特徴を比較し、呪物に象されている精霊と近隣民族との関係を考察することを本稿の目的とする。

## I. 調査地概要

筆者が現地調査をおこなったのは、タンザニア連合共和国 (The United Republic of Tanzania) タンガ州 (Mkoa Tanga)、ルシヨト県 (Wilaya Lushoto) ルシヨト地区 (Kata Lushoto) とその周辺地域である<sup>i</sup>。調査地は南緯 4 度 40～47 分、東経 38 度 17 分に位置しており、北部はケニアとの国境に接している。ルシヨト県は東部弧状山地帯<sup>ii</sup>の 1 つである西部ウサンバラ山地の西側斜面の山間にあり、標高の最高地点は 2,300m、行政の中心地であるルシヨト市街 (Lushoto Mjini) の標高は 1,400 m である。ルシヨト県の面積は 2,500km<sup>2</sup>で、その 90% を山地が占めている。

ルシヨト県は 10 月から 12 月の小雨期と 3 月から 6 月の大雨期に大きく

分かれる。小雨期は年間総雨量の25%程であるが、10月から3月の平均気温が20℃を超えるため、トウモロコシや豆類などの周期的な作物や一年生の作物の栽培に適した期間である。大雨期の降水量はこの地域の地理的影響で変化する。標高の高いルシヨト（標高1,400mから1,560m）の平均年間降水量は1050mmであるが、標高の低いモンボ（Mombo）（標高800m）の平均年間降水量は611mmである。この高い降水量は、インド洋の湿気を含んだ南東からの貿易風によってもたらされる（Kajembe, G.C. 1994）。

ルシヨト県の人口は男性190,873人、女性227,779人、計418,652人（2002年度国勢調査）である。この地域の主要民族はサンバア（Msambaa）<sup>iii</sup>であり、人口の約80%を占めるといわれている。彼らの多くがムスリムである。また同地域にはサンバアの他にジグア（Mzigua）、パレ（Mpare）、ムブグ（Mmbugu）、マサイ（Mmasai）、チャガ（Mchaga）などの民族も居住している。

サンバア社会は原則として父系出自集団で構成されている。集落はリネッジを単位としており、幾つかの集落で1つのクランを形成している。

タンザニアではスワヒリ語（Kiswahili）を国語とし、英語を公用語としている。サンバアの母語であるサンバア語（Kisambaa）は、家族内や同じサンバア同士の日常的な会話をはじめ、儀礼など特別な場合においても使用されている。しかし教育現場においては、小学校ではスワヒリ語、中学校以上では英語が教育言語として使用されている。

この地域の主な生業はトウモロコシを主作物とした農耕で、牛や山羊、鶏などの家畜の飼育も行っている。豆類やイモ類はじめ、バナナやキャッサバ、サトウキビ、果物類など様々な作物は谷に下る斜面を利用して栽培されている。また北部地域ではトマトやキャベツなどの高原野菜が栽培され、モシ（Moshi）やタンガといった近隣の都市やダル・エス・サラーム（Dar es Salaam）などの大都市へも出荷している。

## Ⅱ. ルシヨト地域の歴史

この章では、18 世紀半ばに西部ウサンバラ山地一帯に成立したサンバア王国の歴史と、19 世紀に初頭から東アフリカ沿岸部に展開した 4 本の長距離貿易路の 1 つであるパンガニルートの歴史とその周辺民族との関係を記述する。以下に述べる歴史は、ファイアーマン (Feierman, S. 1974)、ジョンソン (Johansson, L 2001)、ンコンドカヤ (Nkondokaya, V.G2003)、富永 (富永 1981) の記述をまとめたものである。

### 1. サンバア王国成立以前

西部ウサンバラ山地には、サンバアの祖先が移住してくる前から既に定住していた人びとが存在していたといわれているが、詳細についてはあまり知られていない。彼らはアフリカ大陸にバナナやトウモロコシ、キャッサバなどが持ち込まれる以前から鉄器を使ってモロコシや豆類などを栽培してこの地域に暮らしていたといわれている。サンバアの祖先<sup>iv</sup>がこの地域に移り住んだ年代は明確ではないが数百年前、南部のングウ山地から移住してきたとされる。この頃の基本的な政治単位は村落であった。村落のリーダーはリネッジの長で、メンバーは息子や孫などの親族であった。最初に定住した祖先につながる人びとがその土地に対する権利を持ち、村を支配するリネッジは、その近隣のリネッジと父系の血縁でつながっていた。こうした血縁関係を持つ村々は、共同の儀式を司るリーダーを相互に承認し、共同で儀式を行っていた。西部ウサンバラ山地のリネッジとクランの関係は、一つのクラン内に複数のリネッジを含むものであり、言い換えれば、幾つかの村で一つのクランを形成していたことになる。さらにクラン間には、防御や交易、結婚相手の交換といった目的のため、より広い地域にわたる協力が必要になったため、複雑な相互依存関係や制度が生じた (Johansson, L 2001)。

17 世紀から 18 世紀にかけてケニアの内陸部からクシ語族に属するムブグ (Mmbugu) とナンゴ (Mnango) という民族が西部ウサンバラ山地へ移住を始めた。この習慣や儀礼を異にする移民の到来によって彼らと西部

ウサンバラ山地の先住の人びとの間に土地をめぐる軋轢が生じ、それまでリネッジあるいはクラン単位で分立していた地域の社会的均衡を崩したと考えられている (Feierman, S. 1974)。

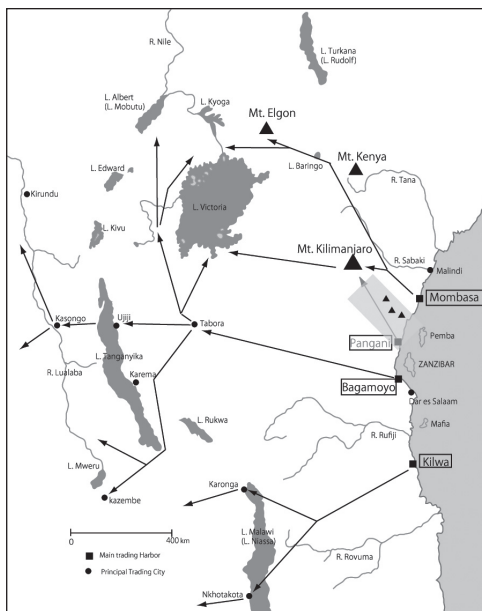
この土地をめぐる軋轢から生じた不安定な状況を解決し、その実績によって西部ウサンバラ山地の人びとに支配者として受け入れられたのが、キリンディ・クラン (Kilindi) であった。このキリンディ・クランは支配の正統性を示すムベガ (Mbegha) の伝説を持つ。ムベガは南部のングウ山地から来た狩人であると言われている。緊張関係を解決したキリンディ・クランが「王」として迎えられ、これによりサンバア王国が成立した (Feierman, S. 1974)。

## 2. サンバア王国成立後

サンバア王国は19世紀初頭キンヤシ (Kinyashi) の時代に勢力を拡大し始めて、4代目の王キムウェリ・エ・ニユンバイ (Kimweri ye Nyumbai) の時代に西部ウサンバラ山地のブガ (Vugha) を拠点として東部ウサンバラ山地から海岸部沿岸に居住しているボンデイ (Mbondei) までを勢力下に置き、全盛期を迎えた。このキムウェリ時代の末期が長距離交易の発展期に当たる。また長距離交易に経済的基盤をおいていたキムウェリの息子であるセンボジャ (Semboja) の台頭の時期とも重なっていた。センボジャはガレ (Gare) の首長に任命されながらも任務を全くすることなく左遷されてマズインデ (Mazinde) に拠点を移した。マズインデは交易路の近くに位置するため、長距離交易に関心を持っていたセンボジャにとって格好の場所であった。キムウェリの死後、王位を継いだのはセンボジャの甥のシェクルワヴ (Shekulwavu) であった。センボジャとシェクルワヴとの間にサンバア王国の支配権をめぐる闘争が10数年間続き、結局センボジャの勝利で終わったが、自ら王位につくことはなく、マズインデから隔たった王都ブガには無力な王を据えて、自らはマズインデを拠点としてサンバア王国全体にその権力を及ぼすことになり、サンバア王国の中央集権体制は崩壊していった (Feierman, S. 1974)。

### 3. 長距離交易（パンガニルート）の歴史

#### ①長距離交易の発展



地図1：東アフリカ長距離交易ルート

東アフリカには、19 世紀から発達した 4 本の長距離交易ルートがある(地図1<sup>v</sup>)。南からキルワ (Kilwa) ルート、バガモヨ (Bagamoyo) ルート、パンガニルート (Pangani) ルート、モンバサ (Mombasa) ルートである。これらの長距離交易ルートはザンジバル (Zanzibar) を窓口としたインド洋交易と密接な関係がある。主要交易品は象牙や奴隷、クローヴ (丁字) など、これらと銃や弾丸、綿布、ビーズなどをアラブ

人やスワヒリ商人との間で交換を行っていた (富永 1981)。

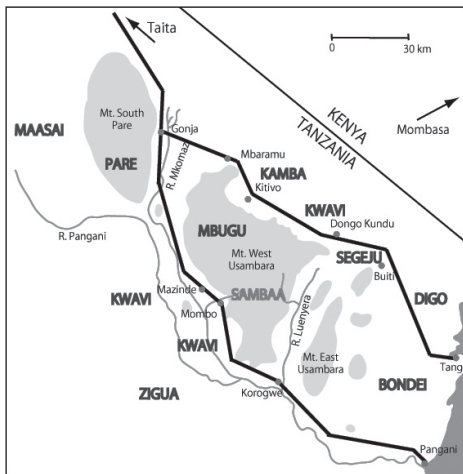
象牙は 18 世紀末からのピアノの鍵盤やビリヤードの材料として世界的に需要が拡大した。この世界的な需要により象の乱獲が起こり、象牙の産出量は 1860 年代をピークとして減少の一途をたどる。しかしこれが象牙の世界市場価格の高騰を招き、結果的に象牙を求める商人を内陸部深くに駆りたてることとなった。

その後、1870 年代前半に東アフリカにおける奴隷貿易の最盛期をむかえる。その要因としては輸出品としての奴隷の増加のほか、象牙交易の発展につれ海岸部で組織される商隊のポーターとしての奴隷の需要の増加やザンジバルにおけるクローヴ栽培の発展に伴う労働力需要の増加などもあげられる。しかし、1873 年に奴隷貿易禁止令が公布され、1976 年にそれを補足する陸上ルートの輸送禁止条令が出されると事実上、奴隷貿易は禁

止となり、次第に衰退していくことになる。

パンガニルートは、他の3本のルートに比べて比較的遅くに発展したルートで、海岸部のパンガニ港から東西ウサンバラ山地、南北パレ山地、キリマンジャロ山麓を通り、ケニア内陸部へと続く経路である。19世紀初頭にモンバサの後背地で活躍していた遊牧民のカンバ（Mkamba）が、象の減少によりキリマンジャロ山麓やパレ山地やケニアの内陸方面に活動範囲を拡大したことによって発展したと考えられている。その後、1976年の奴隷貿易禁止以降、奴隷交易の主要供給ルートであったキルワルートからパンガニルートやモンバサルルートなど北部ルートへと供給地が移行し、1896年まで密貿易の形で奴隷交易は継続したが、パンガニルートの奴隷貿易は、1870年代に最盛期を迎えたキルワルートに比べると人数的には少なかったといわれている（富永 1981）。

## ②パンガニルート沿いの周辺民族の状況（地図2<sup>vi</sup>）



地図2：パンガニルートと周辺民族

パンガニルート展開以前から西部ウサンバラ山地に居住するザンバアの間では、カンバ、クワヴィ（Mkwavi）、セゲジュ（Msegeju）、ジグア（Mzigua）などの平野部の遊牧民との間で交易が行われていた。これらの平野部の民族とサンバアとの間で行われた交易は、主に平野部の肉類と山地の穀物とバナナとの交換であった。この交易は長距離交易展開

時において、沿岸部からの商隊への食料供給を目的としたマーケットとして発展した（Feierman, S. 1974）。

サンバア王国とパンガニルートの関係は、上述したようにキムウェリの

時代に始まった。しかし、実際にはこの地域で海岸部との交易を独占していたのは平野部の遊牧民ジグアであったと言われている。キムウェリは安定した政治体系の維持のため、外部との交流を注意深くコントロールせざるを得なかったためである。しかし、息子のセンボジャが主導権を握り、パンガニルートにおいて交易活動での成功を収めた要因としては、近隣の遊牧民との友好関係や従属化、南部パレ山地への進出があげられる。象牙を平野部の人びとから調達しなければならなかったセンボジャにとって交易の独占のためには彼らを味方に引き入れることが必須条件であったし、奴隷や家畜の共有源であった南パレ山地への進出はセンボジャの交易活動の重要な役割を担っていたためである。センボジャは南パレ山地から買ってきた牛と交換にカンバ（Mkamba）もたらす象牙を独占し、それらを海岸部のインド商人に売って銃や弾薬やその他の輸入資源を手に入っていた。ジグアとの関係は、彼らはセンボジャに対して貢物をしてする間柄であった。また、南パレ山地山麓のヘダル（Hedaru）にはマサイを傭兵として配置し、彼らにウサンバラ山地の村を襲撃させ、その一部を分け前として入手していた。この様に平野部の遊牧民との共存関係を成し遂げていた（Feierman, S. 1974）。

### Ⅲ．サンバア社会の精霊と呪物

#### 1. 伝統医療従事者

伝統医療従事者は、病気の治療はもとより、人々が日々の生活で直面する様々な問題にも対処する存在である。その対処方法は個々の伝統医療従事者によって異なるが、主に植物を用いて作られた「薬」の処方のほか、精霊への祈りや呪術的实践を伴う儀礼の執行などである。伝統医療従事者が行う「薬」の処方仕方や儀礼の執行は、伝統医療従事者達の間で売買されることもあるが、一般的に「薬」の知識は、親族から習得したものと、関係のある精霊が夢の中に現れて伝統医療従事者に教授したものに分かれる。

また、伝統医療従事者の活動は様々であるが、その活動様式は大きく 2



つに分類することが出来ると考えられる。一方は精霊との関係を保持しながら、様々な病気や災難に対処する活動である。伝統医療従事者の多くは、複数の精霊と関係を持ち、精霊に憑依されることで儀礼を遂行する。精霊との関係は伝統医療従事者自身が活動を行う上で重要である。他方は、複数の定期市を移動しながら薬を売る者や、コーランの一文を板に書き付けて、それを水で洗い流してその水を病人に与える治療を行う者による活動である。これらの伝統医療従事者は精霊と関係を持つ者は少なく、自らの薬の知識やコーランの「力」を拠り所として活動している。

## 2. 呪物の種類

伝統医療従事者が所持している「呪物 (tunguri)」には様々な形体がある。主にヒョウタン (kibuyu) が使われていることが多いが、動物の角 (pembe) やカタツムリの殻 (kaka la konokono)、棒 (fimbo) など多様性に富んでいる。

呪物の中には様々な素材、植物の葉、茎、根、動物の体の一部や毛皮、鉱物などを調合して作られた「薬」が保存されている。呪物に保存されている「薬」はもとより、呪物それ自体にも呪術的な「力」があると考えられており、儀礼の際には様々な場面で用いられる。この様な呪物は、親族、特に伝統医療従事者であった隔離世代の親族から受け継いだものと、関係をもつ精霊が夢に現れて作り方を教授してもらい新に製作されたものに分けることが出来る。呪物にはそれぞれ性別や名前が付けられている。その名前は、伝統医療従事者と関係のある精霊の名前や近隣民族の名前、外部から取り入れられたモノの名前などである。また、表面には関係する精霊に対応した様々な色のビーズや動物の毛皮、布や金属などが装飾されている。そして、蓋には名前に由来する近隣民族の顔の彫刻が施されているものもある。以下、呪物の蓋に異国人や近隣民族の顔が彫刻されている呪物を取り上げて紹介する。尚、これから紹介する呪物はルショトの市街地で活動している伝統医療従事者<sup>vii</sup>が所持している呪物である。

### ①ムワラブ (Mwarabu)

ムワラブは男性で、1985年に製作された呪物である。形体はヒョウタ

ンで、その周りには白いプラスチックの首飾りと、白色の雄山羊の毛皮が装飾されている。蓋にはアラブ人の顔が彫られている。これらの装飾は、精霊ムアラブ（jini Mwarabu）が夢の中に現れて告げたものである。ムワラブは全ての物事に幸運をもたらし、未来に光を与えるものであるとみなされており、そのため病気治療に用いられる際は、様々な病気に対処するとされるが、特に頭痛や足の痛み、腹痛などについての治療に用いられる。

#### ②バハリ（Bahari）

バハリは祖父が製作したトゥングーリで、祖父の死後、彼が受け継いだものである。バハリは男性である。バハリはスワヒリ語で「海」を意味する言葉である。そのためバハリには青色のビーズの首飾りと貝殻と小石で作った白色の腕輪の装飾が施されている。形体はヒョウタンで、その中には、潮が引いた後の海岸に残った海草を乾燥させたものが「葉」として入れられている。蓋にはケニアの海岸部やケニアとの国境を接する地域に住んでいるディゴ（Mdigo）の顔が彫刻されている。バハリは商売が上手くいかないときや恋人が欲しいときなどに用いられる。この伝統医療従事者はキオスクを経営しており、店の中にバハリがいつも置かれている。

#### ③マサイ（Masai）

マサイは男性で 1987 年に製作された呪物である。精霊ムマサイが夢の中に現れ、「未来に待ち受けている不幸とあなたの家族に起こる災難を見るために私を使いなさい（Nitumie mimi, kwa kuona kibaya kilicho mbele yako na kilicho nyumba yako.）」と告げ、マサイの作り方を教授した。形体は木の棒で、周りをビーズで飾られている。上部にはマサイの顔が彫られており、下部には「葉」が埋め込まれている。マサイは状況において悪いモノや汚いモノを探すために用いられる。儀礼の最初の段階で、左手にマサイ、右手に蠅払いを持ち、鏡を額に付けて災いをもたらす悪いモノや汚いモノを探す。また、家の入り口に立て掛けて置き、悪い精霊などが家に入り込まないように家屋敷を守る働きもする。

#### ④ムトゥンバ（Mtumba）

ムトゥンバは女性で 1989 年に製作された呪物である。精霊ムワラブが夢の中に現れ、「好む人と好まれない人に対してこの人を使いなさい

(Mtumieni mtu huyu kwa anayependa na asiyeenda.)」と告げ、ムトゥンバの作り方を教授した。ムトゥンバは女性であるが、男性のムトゥンバもあり、一対で用いられる。形状はそれぞれヒョウタンである。女性のムトゥンバには樹皮が巻かれており、蓋にはムクワビ (Mkwavi) という民族の顔が彫られている。男性のムトゥンバには雄山羊の毛皮が巻かれている。ムトゥンバは「母方のオジ」を意味する言葉である。そのため母方の一族の呪物 (tunguri la ukoo wa mama) であり、父方の親族と仲違いした母親側の親戚を見つけ、口論した人達の間に置いて仲裁をする働きをするといわれている。女性のムトゥンバは、ヘビに噛まれたときの解毒剤としてや、子供が出来ない女性や流産したい女性などに用いられる。また男性のムトゥンバは剃刀などで皮膚に傷を付けて、そこに「薬」を塗り込み、腰痛の緩和剤としてや男性の精力剤として用いられる。

#### ⑤チャムボ (Chambo)

チャムボは男性で 1987 年に製作された呪物である。精霊ムアラブが夢の中に現れ、「牛や畑、家族を守るために助けてくれるチャムボという道具を作りなさい (Tengeneza kitu aina ya Chambo ambacho kitusaidia kulinda ng' onbe, shamba na familia yako. )」と告げ、チャムボの作り方を教授した。形体はヒョウタンで、その周りには木製の首飾りが飾られており、蓋には隣接民族であるムブグの顔が彫刻されている。ムブグは 17 世紀から 18 世紀にかけてケニアの内陸部より移住してきたクシ語族の民族である。ムブグは昔、畑を荒らして困らせる存在であったといわれている。従ってチャムボは、畑の作物を泥棒から守ったり、家屋敷などへの侵入を防いだりするために用いられる。

以上の様に、呪物にはルシヨト周辺地域に居住する民族や異国人の顔が彫刻されている。これらの民族とサンバアとの関係をウサンバラ山地の歴史と照らし合わせながら、周辺民族がどの様に表象され、呪物への取り込みが行われているのかを整理し、最後に表にまとめる。

#### Ⅳ．まとめ—呪物化される周辺民族

パンガニルート沿い、または西部ウサンバラ山地周辺に居住する民族は、マサイ (Mmasai)、パレ (Mpare)、クワヴィ (Mkwavi)、ジグア (Mzigua)、ムブグ (Mmbugu)、カンバ (Mkamba)、セゲジュ (Msegeju)、ディゴ (Mdigo)、ボンデイ (Mbondei) である。これらの民族で呪物の蓋の彫刻に取り入れられているのはマサイ、クワヴィ、ムブグ、ディゴである。これに長距離交易を組織したアラブ人を加えた5つの民族(集団)の特徴やイメージがどの様に呪物に取り入れられているかを明らかにする。

呪物の蓋に彫刻されているパンガニルート沿いの周辺民族または異国人のイメージと呪物の役割の関係を表すと次のようになる(表1)。

(表1) 周辺民族のイメージと呪物の役割

表1：周辺民族の関係と呪物の役割				
呪物の名前	意味	蓋の民族	民族／異国人像	呪物の役割
ムアラブ (Mwarabu)	アラブ人	アラブ人 (Mwarabu)	長距離交易を主導し、輸入品「銃や弾丸、布、ビーズ」をもたらし存在	全ての物事に幸運をもたらし、未来に光を与えるもの
バハリ (Bahari)	海	ディゴ (Mdigo)	海岸部に住む民族でアラブ商人と内陸部の民族との仲介役を行う存在	商売が上手くいかない時に用いる
マサイ (Mmasai)	マサイ	マサイ (Mmasai)	象牙や肉をもたらし遊牧民、傭兵としてザンバア王国と従属関係にあった存在	悪い精霊などから家屋敷を守る。悪いモノを探し出す
ムトゥンバ (Mtumba)	母方オジ	クワヴィ (Mkwavi)	マサイの一分派で遊牧民、肉と穀物の交換を行うと共に傭兵として従属的な存在	仲違いした親族の仲裁をする。
チャンボ (Chambo)	人物名	ムブグ (Mmbugu)	サンバア王国成立以前に移住したクシ系民族。土地をめくり軋轢が生じた存在	泥棒から畑の作物を守ったり、家屋敷への侵入を防ぐ

サンバアにとってのアラブ人とは、長距離交易を主導し、銃や弾丸、綿布、ビーズなどの交易品を内陸部にもたらし存在であった。またサンバアの多くがムスリムであるため、アラブ世界との関係は長距離交易におけ

る関係だけではなく、サンバアの社会生活の基盤を成す宗教的な側面からの影響も考えられる。このようなアラブ人を表象した呪物は、「全ての物事に幸運をもたらし、未来に光を与えるもの」として用いられていると考えられる。

海岸部に居住しているディゴは、長距離交易において、象牙を内陸部のカンバなどから買い取り、それをアラブ商人などに売り渡す仲介を行っていた。また、アラブ商人が自ら商隊を編成して内陸部まで進出して行くようになると、ディゴもその商隊の一員に加わるようになる。そのディゴの顔が蓋に彫られている呪物はバハリである。バハリは商売がうまくいかない時に用いて成功させる呪物であるが、象牙貿易で取引を行っていたディゴの活動を取り込んだ物と考えられる。

平野部の遊牧民であるマサイとマサイの一分派であるクワヴィは、長距離交易が始まる以前からサンバアなどの山岳民との間で肉と穀物やバナナとの交換をおこない、共存関係にあった。長距離交易の全盛期にあたるセンボジャの時代になると、マサイやクワヴィは傭兵として軍事集団に加えられるようになり共存関係から従属関係へと変化した。この様にマサイの顔が彫刻されている呪物は、悪い精霊から家屋敷を守る役割や、悪いモノを見つけるために用いられる。マサイは傭兵としてウサンバラ山地周辺の集落を襲撃していた。このような行動を呪物に取り込んだのであろう。

ウサンバラ山地に移住してきたムブグは、サンバアと土地をめぐりたびたび軋轢が生じていた。そのため「昔、畑を荒らして困らせる存在」であったというイメージがサンバアの間で広まったのだと考えられる。ムブグの顔が彫られている呪物のチャムボは、泥棒から畑の作物を守ったり、家屋敷への侵入を防ぐために用いられている。

以上の様に 18 世紀半ばのサンバー王国成立や 19 世紀に展開した長距離交易に焦点を当て周辺民族を捉えてみると、呪物は歴史的に軋轢や接触を持った周辺民族の特徴や、または活動を模倣し、名前や用途として呪物に取り入れていると考えられる。

## 注

- i タンガ州にはルシヨト県の他、タンガ (Tanga)、ムヘザ (Muheza)、コログウェ (Korogwe)、パンガニ (Pangani)、ハンデーニ (Handeni)、キインディ (Kilindi) の6つの県がある。
- ii 東部弧状山地帯とは、ケニア南部のタイタ (Taita) 丘陵地帯からタンザニアの北東部に位置する南北パレ (Pare) 山地、東西ウサンバラ (Usambara) 山地、タンザニアの中部に位置するングウ (Nguu) 山地、ングル (Nguru) 山地、ウルグル (Uluguru) 山地、ルベホ (Rubeho) 山地、ウカグル (Ukaguru) 山地、タンザニアの南部に位置するウドゥズングワ (Udzungwa) 山地、マヘンゲ (Mahenge) と連なる山地帯のことである。
- iii サンバアの言語系統は、ケニア高地バントゥーに分類され、近隣のパレ (Pare) やチャガ (Chaga) をはじめ、ケニアのキクユ (Kikuyu) やカンバなどと同じ言語グループである。
- iv サンバアの祖先は、周辺の5つ民族、ジグア (Zigua) やボンデイ (Bondei)、キリンディ (Kilindi)、ルブ (Luvu)、ングウ (Nguu) と共通の起源伝承をもつ。サンバアをあわせた6つの民族の祖先はセウタ (Seuta) 「弓の子供」と呼ばれている (Nkondokaya, V.G2003:xiv-xv)。
- v Map 29 East Africa showing principle trade routes of the nineteenth century (Odhiambo, E. S. Atien, Ouso, T. I., Williams, J.F. M. 1977:p92) を基に筆者が加筆を行い作成した。
- vi Map 3 Shambaai and its neighbors (Feierman, S. 1974:97) を基に筆者が加筆を行い作成した。
- vii 事例にあげた伝統医療従事者は男性で、1972年ルシヨト県の北西部に位置するムタエ (Mtae) に生まれた。彼はルシヨトの主要民族であるサンバアでムスリムである。彼はルシヨト県の伝統医療従事者協会の会員であり、ルシヨト文化局が発行している登録証を携帯している。1983年、彼が11歳の時に慢性的な頭痛に悩まされるようになり、病院に何度も通院したが回復することはなかった。その時の頭の痛さは「頭の中で大きな太鼓が鳴っているような感じ」だったという。1984年、12歳の時に、伝統医療従事者として活動していた祖父から様々な知識、例えば薬を作るための植物の種類や調合の仕方などを教え

でもらった。1985年、13歳の時に、最初の「精霊」が夢に現れ、彼に「薬」となる植物の名前と治療に必要な知識を告げた。この後、「精霊」は彼の夢に現れ、「呪物」の作り方と「薬」の調合の仕方を教える様になった。1986年から1998年までタンガ州ハンデーニで伝統医療従事者として治療活動を行い、1998年からルショトで治療活動を行っている。また2009年の1月からは、タンザニアの主要都市であるダル・エス・サラーム（Dar es Salaam）で、同じクラン出身の伝統医療従事者と共同で事務所を開き、ルショトとダル・エス・サラームとを行き来しながら治療活動を行っている。尚、彼が所持している呪物や関係がある精霊についての詳細は須田（須田2006b）を参照

### 参考・引用文献

Feierman, Steven

1974 The Shambaa Kingdom: A History. The University of Wisconsin Press

Giles, L.Linda

1987 “Possession Cults on the Coast: A Re-Examination of Theories of Marginality” Africa 57 (2) , pp.234-258

Johansson, Lars

2001 Ten Million Trees later: Land use change in the West Usambara Mountains GTZ

Kajembe, George C.

1994 Indigenous management systems as a basis for community forestry in Tanzania: a case study of Dodoma urban and Lushoto Districts Tropical Resource Management Papers

Lambek, Michael

1988 “spirit Possession /spirit Succession :Aspects of Social Continuity among Malagasy speakers in Mayotte” American Ethnologist 14 (4) , pp. 710-731

Mesaki, Simeon

2000 The Changing Role of Traditional Medicine and Healing in Dar es Salaam:1970s-1990s. University of Dar es Salaam

Murdock, p. George

1959 Its Peoples and Their Culture History McGraw-Hill Book Company

Moreau, R.E.

1944 “The Joking Relationship in Tanganyika” , Africa, xiv pp.386-400

Nkondokaya, Vinceny Geofrey

2003 ASILI YA WASEUTA: Yaani Wazigua, Wanguu, Wasambaa, Wabondei,  
Wakilindi na Waluvu Peramiho press

Odiambo, E. S. Atien, Ouso, T. I., Williams, J.F. M.

1977 A History of East Africa Longman Group Limited

Pedler, F.J.

1940 “Joking Relationship in East Africa” , Africa, Xiii, pp.170-173

Radcliffe-Brown, A. R.

1940 “On Joking Relationship” , Africa, Xiii pp.195-210

Stoller, Paul

1995 Embodying Colonial Memories: Spirit Possession, Power, and the Hauka  
In West Africa. Routledge

Thompson, Barbara

1999 Shambaa Ughanga :Converging presences in the embodiment of  
tradition, transformation and redefinition  
<http://www.arts.uwa.edu.au/Motspluriels/mp1299bt.html>

慶田勝彦

2003 「旅する憑依霊－ケニア海岸部における精霊憑依ペーボについて－」『こ  
ろと文化』 2 (1) pp. 18-27

須田征志

2006a 「タンザニア・ルシヨト地域における伝統医療従事者の活動」『現代アフリ  
カ社会における宗教的救済の都市人類学的研究』和崎春日編（基盤研究 B  
(1) 課題番号 14401012) 研究報告書

2006b 「呪物と精霊－タンザニア・ルシヨト地域における伝統医療従事者の現状－」  
京都文教文化人類学研究第 3 号 京都文教大学大学院文化人類学研究科

2008 「治療儀礼の継承と創造」『現代アフリカにおける青少年の安全保障と伝統



の崩壊抑止に関する人類学的研究』佐々木重洋編（基盤研究 A 課題番号  
17251013）研究成果報告書

富永智津子

1981 「19 世紀東アフリカにおける長距離交易の発展と首長制社会の変容」『ア  
ジア経済』XX II -5 アジア経済研究所

花渕馨也

2005 『精霊の子供－コモロ諸島における憑依の民族誌』 風響社